

一、次の詩とその鑑賞文を読み、後の(1)～(3)の問いに答えなさい。 [H20]

朝日をよめる歌

室生犀星

その十

①朝日がおとづれるときに  
何処か遠いところで

②眩ゆいばかりの重い書物の一頁が  
そよかぜのやうに音もなく開かれて行く。

東の空が朝の光に明けてくるとき、まっさらな新しい一日が始まります。暗い夜のうちに何があるうとも、また昨日からの持ち越しの何があるうとも、そういう時こそ、ひとはこの新しい一日に新たな希望を懸ける。

その時、世界のどこか遠いところ(神々が住まうところでしょうか)に、この世で起きる事柄のすべてが書き込まれて、まばゆく輝いている厚く重い書物があって、その中の一頁が開かれる。それは今日起きるだろうことが書き込まれている頁です。

そこに何が書かれているのか、人間はまだ知りません。しかし朝の訪れとともに、神の栄光にまばゆく光る「重い書物」の頁が、「そよかぜのやうに」軽やかに開いて行くとき、ひとはそこに何よりも、希望の文字を読み取るのです。

この最終行には、世の人々すべてへ宛てた詩人の祝福の気持ちだが、「そよかぜのやうに」優しく、漂っています。この詩人は、時として鬱屈を胸に懐き、時として偏屈に似た憤りを示す人でもあったのですが。

(柴田翔『詩に誘われて』による)

(注) 鬱屈：気が晴れないで、ふさぎ(む)むこと。  
偏屈：ひねくれていること。  
憤り：怒りや腹立ち。

(1) 詩の中の——線部①の「朝日がおとづれる」と同じ表現技法が用いられているものを、次のア～エから一つ選び、その記号を書け。

- ア、雨がぼつりと降る。
- イ、星がそつとささやく。
- ウ、手紙を何度も何度も読み返す。
- エ、行こう、あの町へ。

(2) 詩の中の——線部②に「眩ゆいばかりの重い書物の一頁」とあるが、その頁が開かれるときに、ひとはこの頁に書かれているものの中から何を読み取ると鑑賞文の筆者は述べているか。鑑賞文中から二字でそのまま抜き出して書け。

(3) 鑑賞文の筆者は、この詩には詩人のどのような心情があらわれていると述べているか。その説明として適切なものを、次のア～エから一つ選び、その記号を書け。

- ア、新しい一日の始まりに対する恐れ
- イ、神の栄光にまばゆく光る書物への敬意
- ウ、世のすべての人々へ宛てた祝福
- エ、胸に懐いている鬱屈や、偏屈に似た憤り

一、次の俳句を読み、後の(1)～(3)の問いに答えなさい。なお、A～Eはそれぞれ俳句を示す記号である。 [H21]

A チューリップ喜びだけを持つてゐる

細見綾子

B 掌にうけし月光海へまた返す

松原地蔵尊

C こころこんな日蝶がはずんでゆく

荻原井泉水

D てぬぐひの如く大きく花菖蒲

岸本尚毅

E 梅が散るほうれん草の畑かな

清崎敏郎

(1) A～Eの俳句の中で、自由律の俳句を一つ選び、その記号を書け。

(2) 次の俳句と同じ季節を詠んでいるものを、A～Eの俳句から一つ選び、その記号を書け。

赤蜻蛉筑波に雲もなかりけり

正岡子規

(3) Eの俳句について述べた文として適切なものを、次のア～エから一つ選び、その記号を書け。

ア、作者は対象と同化しながら、情景を繰り返し描写して、自分の思いを静かに深くこめていく。

イ、作者はありのままの情景を、切れ字を用いて表現し、その色彩美への感動を印象付けている。

ウ、作者は想像上の世界に自分を置き、対比によって、より神秘的な雰囲気漂わせている。

エ、作者は孤独な心を雄大な風景の中にうつし出して、新たな希望に焦点をあてようとしている。

一、次の詩とその鑑賞文を読み、後の(1)～(3)の問いに答えなさい。 [H20]

朝日をよめる歌

室生犀星

その十

①朝日がおとづれるときに  
何処か遠いところで

②眩ゆいばかりの重い書物の一頁が  
そよかぜのやうに音もなく開かれて行く。

東の空が朝の光に明けてくるとき、まっさらな新しい一日が始まります。暗い夜のうちに何があるうとも、また昨日からの持ち越しの何があるうとも、そういう時こそ、ひとはこの新しい一日に新たな希望を懸ける。

その時、世界のどこか遠いところ(神々が住まうところでしょうか)に、この世で起きる事柄のすべてが書き込まれて、まばゆく輝いている厚く重い書物があって、その中の一頁が開かれる。それは今日起きるだろうことが書き込まれている頁です。

そこに何が書かれているのか、人間はまだ知りません。しかし朝の訪れとともに、神の栄光にまばゆく光る「重い書物」の頁が、「そよかぜのやうに」軽やかに開いて行くとき、ひとはそこに何よりも、希望の文字を読み取るのです。

この最終行には、世の人々すべてへ宛てた詩人の祝福の気持ちだが、「そよかぜのやうに」優しく、漂っています。この詩人は、時として鬱屈を胸に懐き、時として偏屈に似た憤りを示す人でもあったのですが。

(柴田翔「詩に誘われて」による)

(注) 鬱屈：気が晴れないで、ふさぎ(む)むこと。  
偏屈：ひねくれていること。  
憤り：怒りや腹立ち。

(1) 詩の中の——線部①の「朝日がおとづれる」と同じ表現技法が用いられているものを、次のア～エから一つ選び、その記号を書け。 ※擬人法が使われているものを探す

- ア、雨がぼつりと降る。(擬態語)
- イ、星がそつとささやく。(擬人法)
- ウ、手紙を何度も何度も読み返す。(反復法)
- エ、行こう、あの町へ。(倒置法・通常は「あの町へ行こう」)

(2) 詩の中の——線部②に「眩ゆいばかりの重い書物の一頁」とあるが、その頁が開かれるときに、ひとはこの頁に書かれているものの中から何を読み取ると鑑賞文の筆者は述べているか。鑑賞文中から二字でそのまま抜き出して書け。

※鑑賞文の第三段落に「ひとはそこに何よりも、希望の文字を読み取る」とある。この「そこ」とは、同じ文にある「まばゆく光る『重い書物』の頁」、つまり、棒線部と同じ。

希望

(3) 鑑賞文の筆者は、この詩には詩人のどのような心情があらわれていると述べているか。その説明として適切なものを、次のア～エから一つ選び、その記号を書け。

「鑑賞文の第四段落にある内容に注意する。」

- ア、新しい一日の始まりに対する恐れ
- イ、神の栄光にまばゆく光る書物への敬意
- ウ、世のすべての人々へ宛てた祝福
- エ、胸に懐いている鬱屈や、偏屈に似た憤り

ウ

一、次の俳句を読み、後の(1)～(3)の問いに答えなさい。なお、A～Eはそれぞれ俳句を示す記号である。 [H21]

- A チューリップ喜びだけを持つてゐる 細見綾子
- B 掌にうけし月光海へまた返す 松原地蔵尊
- C こころこんな日蝶がはずんでゆく 荻原井泉水
- D てぬぐひの如く大きく花菖蒲 岸本尚毅
- E 梅が散るほうれん草の畑かな 清崎敏郎

(1) A～Eの俳句の中で、自由律の俳句を一つ選び、その記号を書け。

自由律とは、五七五の定型にこだわらず自由な音数で詠まれること。

C

(2) 次の俳句と同じ季節を詠んでいるものを、A～Eの俳句から一つ選び、その記号を書け。

赤蜻蛉筑波に雲もなかりけり

正岡子規

B

「赤蜻蛉」は秋の季語である。

俳句の季節は、春(現在の2～4月)夏(5～7月)秋(8～10)冬(11～1月)であることに注意

(3) Eの俳句について述べた文として適切なものを、次のア～エから一つ選び、その記号を書け。

ア、作者は対象と同化しながら、情景を繰り返し描写して、自分の思いを静かに深くこめていく。

イ、作者はありのままの情景を、切れ字を用いて表現し、その色彩美への感動を印象付けている。

ウ、作者は想像上の世界に自分を置き、対比によって、より神秘的な雰囲気を漂わせている。

エ、作者は孤独な心を雄大な風景の中にうつし出して、新たな希望に焦点をあてようとしている。

イ

Eの「かな」は切れ字で、梅とほうれん草の色の対比を印象深くする働きがある。  
切れ字とは、意味の切れ目を示す言葉。作者の感動の中心であり、句全体を引き締める。代表的な切れ字は「かな・や・けり」等。

一、次の短歌とそれについて生徒がつくったメモを読み、後の(1)・(2)の問いに答えなさい。【H22】

【短歌】

夕立の雨うちふれり庭のへに  
ひとつの蝉の啼きとほるこゑ

土田耕平

【メモ】

○言葉の意味

・庭のへ：庭の方

○表現の特徴

・歌の最後が「こゑ」という名詞になっている…この表現技法は **A** である。

・「**B**」という助詞が多く用いられている…歌のリズムを美しくしている。

(1) メモ中の **A** に当てはまる表現技法を、次のア～エから一つ選び、その記号を書け。

- ア、ひよ 比喩  
イ、まくらことば 枕詞  
ウ、あひま 対句  
エ、たいげん 体言止め

(2) メモ中の **B** に当てはまる助詞を、短歌の中からそのまま抜き出して書け。

一、次の詩とその鑑賞文を読み、後の(1)～(4)の問いに答えなさい。【H23】

鳴く虫

高橋元吉

草かげの

泣く虫たちの宝石工場

どの音もみんなあんなに冴さえているから

虫たちはきつといっしんになって

それぞれがつたいろの宝石を磨いているのだらう

宝石のひかりがうつり

いいようのない色まであって

方々の草かげがほんのりあかるい

【鑑賞文】  
秋です。空が高い。アそれなら、大地は？虫の音がイ高くなります。

そのまま、大自然の詩ですね。みなさん感嘆します。だが、それは日本ウだけのこと。ほとんどの異国人、エとくに西欧人にとっては、雑音なのです。

**A**、文学や美術の対象とはならない。秋の虫の歌、それに春の桜の花、これに魅かれるのは、極東の島国の独自。不思議ですね。

作品『泣く虫』の虫の歌の受けとりかた、これはその日本のなかでも、また特別ですね。「宝石を磨いている」音が、あおの虫の音というのです。そればかりではない。その「宝石のひかり」が光り出て、「方々の草かげがほんのり明るい」というのです。これには驚きます。これまでの誰も思いつかないことです。

しかし、この「宝石のひかり」は、いったい何なのでしょう。きつと草むらのなかまで降りそそいできている月の光のことですね。つまり虫は月の光を **B**。そう思いましよう。

(宗左近『あなたにあなたにいたくて生まれてきた詩』による)

(1) 詩の中の ― 線部の「きつと」と品詞が同じものを、鑑賞文中の ～ 線部ア～エから一つ選び、その記号を書け。

(2) 詩の中の || 線部の「うつり」の活用形の名を漢字で書け。

(3) 鑑賞文中の **A** に当てはまる言葉として適切なものを、次のア～エから一つ選び、その記号を書け。

- ア、あそこ ところで  
イ、したがって したがって  
ウ、それとも それとも  
エ、しかし しかし

(4) 鑑賞文中の **B** に当てはまる言葉として適切なものを、詩の中から五字でそのまま抜き出して書け。

一、次の短歌とそれについて生徒がつくったメモを読み、後の(1)・(2)の問いに答えなさい。【H22】

【短歌】

夕立の雨うちふれり庭のへに  
ひとつの蝉の啼きとほるこゑ

土田耕平

【メモ】

○言葉の意味

・庭のへ：庭の方

○表現の特徴

・歌の最後が「こゑ」という名詞になっている…この表現技法は **A** である。

・「**B**」という助詞が多く用いられている…歌のリズムを美しくしている。

(1) メモ中の **A** に当てはまる表現技法を、次のア～エから一つ選び、その記号を書け。

- ア、ひよ 比喩
- イ、まくらご 枕詞
- ウ、対句
- エ、たいごん 体言止め

**E**

(2) メモ中の **B** に当てはまる助詞を、短歌の中からそのまま抜き出して書け。

夕立の雨うちふれり庭のへに  
ひとつの蝉の啼きとほるこゑ

**の**

一、次の詩とその鑑賞文を読み、後の(1)～(4)の問いに答えなさい。【H23】

鳴く虫

高橋元吉

草かげの

泣く虫たちの宝石工場

どの音もみんなあんなに冴えているから

虫たちはきつといっしんになって

それぞれがったいろの宝石を磨いているのだろう

宝石のひかりがうつり

いいようのない色まであって

方々の草かげがほんのりあかるい

【鑑賞文】  
秋です。空が高い。アそれなら、大地は？虫の音がイ高く  
なります。

そのまま、大自然の詩ですね。みなさん感嘆します。だが、それは日本ウだけのこと。ほとんどの異国人、エとくに西欧人にとっては、雑音なのです。

**A**、文学や美術の対象とはならない。秋の虫の歌、それに春の桜の花、これに魅かれるのは、極東の島国の独自。不思議ですね。

作品『泣く虫』の虫の歌の受けとりかた、これはその日本の中でも、また特別ですね。「宝石を磨いている」音が、あおの虫の音というのです。そればかりではない。その「宝石のひかり」が光り出て、「方々の草かげがほんのり明るい」というのです。これには驚きます。これまでの誰も思いつかないことです。

しかし、この「宝石のひかり」は、いったい何なのでしょう。きつと草むらのなかまで降りそそいできている月の光のことですね。つまり虫は月の光を **B**。そう思  
いましょう。

(宗左近『あなたにあなたにあなたに生まれてきた詩』による)

(1) 詩の中の ― 線部の「きつと」と品詞が同じものを、鑑賞文中の ～ 線部ア～エから一つ選び、その記号を書け。

「きつと」は副詞。ア「それなら」は接続詞、  
イ「高く」は形容詞、ウ「だけ」は助詞。

**E**

(2) 詩の中の 〓 線部の「うつり」の活用形の名を漢字で書け。

次に文章が続くような終わり方をしているので連用形。

**連用形**

(3) 鑑賞文中の **A** に当てはまる言葉として適切なものを、次のア～エから一つ選び、その記号を書け。

- ア、ところで
- イ、したがって
- ウ、それとも
- エ、しかし

**I**

(4) 鑑賞文中の **B** に当てはまる言葉として適切なものを、詩の中から五字でそのまま抜き出して書け。

磨  
い  
て  
い  
る